「関係の思考」「連続の思考」をつくる新しい社会科学習の理論と実践

野　口　政　吾*

The Theory and the Practice on New Social Studies to Develop Childrens Ability to Think Relatively and Successively

NOGUCHI Seigo

(Received May 15, 2002)

キーワード　：　マイ・パートナー，社会的ライブモデル

1　「関係の思考」「連続の思考」とは

新しい社会科では，活動や体験を生かしてどのような思考をつくっていくかが大切となってくるであろう。そのため必要な思考が「関係の思考」「連続の思考」だと考えられる。ここでは，「関係の思考」「連続の思考」の考え方について述べてみたい。

（1）関係の思考とは

新しい社会科で求められる資質や能力の一つとして，社会的事象を多面的に考察し，公正に判断する能力や態度が揚げられている。

グローバリゼーションが叫ばれている今日，このような能力や態度を育てることは極めて重要なことである。なぜなら，子どもが将来生きていく社会は，一つの価値観にこだわっていては対応できないほど多様で可変性に富んだものになっていくと考えられるからである。

そこで，社会科の学習においては，社会的事象をできるだけ多面的に見たり考えたりできることや，他者と交流しながら社会的事象に対しての多面的な見方や考え方を理解し，自分の考えを明らかにしていくことが大切となってくる。

このような態度や能力を育成することにより，次のような姿が期待できる。

○社会的事象の意味や働き，特色などを一層的確に，総合的に理解できる

○個性豊かな見方や考え方が育ち，将来生きていくにわたって望ましいバランス感覚を身につけることができる

このことは，望ましい自分自身の考え方や生き方を確立することにもつながっていく。そこで，自分が調べた事象と他の事象の内容を的確につかみ，そのかかわりや関係性を探っていくことができる考え方「関係の思考」を目指して研究を進めていくことにした。

「関係の思考」とは端的に言えば，

*山口大学教育学部附属光小学校教諭

社会科における学習内容（事実，工夫や努力，思いや願いなど）を，それ自体からだけではなく，他との比較における共通点や相違点から見いだしていく考え方

である。

具体的に言えば，次のような比較における共通点や相違点が考えられる。

○地域的（空間的）比較―地域性や場所による共通点や相違点

○時間的比較―過去と現在など，時間による共通点や相違点

○経験的比較―経験の有無や差による共通点や相違点

○立場的比較―位置関係や役割などによる共通点や相違点

たとえば，地域的（空間的）比較においては，「○○にあるＡ施設は他地域のＢ施設と△△は同じだが，□□という違いがある」という見方ができる。

そのような共通点や相違点を見いだし，その理由などを他者とかかわりながら考えることで，事象の意味や役割，特色や思いなどを分かち合い，広い視野でとらえることができる。その後の自分の学びに生かしていくこともできるのである。

（２）「連続の思考」とは

子どもが授業のなかで調べる対象にしていることは，「いま」の社会の状況や様子である。社会生活についての理解を図る社会科にあって，多くの場合「いま」の現実が学習の対象になり教材となる。これは，社会生活について学ぶ社会科の特質であると言える。

しかし，社会の状況や様子は，多くの場合時間が経つと変化していくものである。たとえば，第５学年で我が国の工業について学習する際に，自動車工場を取り上げることが多い。ここでは，「自動車がどのように生産されるか」について調べるが，自動車のつくられ方はいつの時代になっても決して同じではない。それらの内容は将来技術の革新に伴って変わっていくものである。

また，地域によって違っているものも多い。たとえば第３学年では学校の周りの様子を観察したり白地図にまとめたりして調べる学習を行うが，その様子や景観は学校によっても違っているし，またいつまでも同じ状況のままではないのである。

このことは，変わりうるものを調べ，そのことについての知識は，必ずしも確かな知識，将来に生かされる知識にはならないことを意味している。短期間のうちに，知識が腐敗化し，死蔵されてしまうことも多い。

このようなことは歴史の学習においても同様である。特に古代の文化，文明においては，新たな発掘や遺物等の発見によって，これまでの知識や通説が疑われたり書き変えられたりすることもある。

つまり，ここで考えたいことは，変わりうるものを調べ，そのことを覚えたり理解させたりすることにどれだけ意味があるかということである。むしろ重要なことは，調べたことからどんなことが考えられるか，社会的事象のもつ意味や特色，働きなどを考えることができるようにすることである。すなわち，「見えるものから見えないこと」を見いだす力，調べたことをもとに考える力（調べて考える連続の思考）を育てることである。これは，子ども一人一人が，他の対象や事例にも応用・転移できる連続的な知識や力を身に付けることであり，社会を見る目となる思考を獲得できるようにすることである。このような意味合いから，今，調べて考える「連続の思考」を育てる重要性があるのではないかと考えている。

「連続の思考」とは，

事象について「調べ，考えたこと」をもとに他者とかかわり合うことにより，新たな疑問を見いだし，事象相互の意味や価値，関係性などについてさらに「調べ，考えていく」思考

である。

このことは，他者とかかわりながら課題追究活動を深化させていくことであり，事実認識と意味認識を繰り返しながら，社会に対する見方や考え方を広げたり高めたりしていく思考であると言える。

このような「連続の思考」を身につけることにより，次のような子どもの姿が期待できるのである。

○事象に対する思いや考えを他者と交換・交流することにより，事象について広くとらえ，その意味などを考えていくことができる子ども

○他者が詳しく知っている事象の意味，事象に携わってる人の思いや願い，工夫などを知り，自分の学びと比較したり自分の学びに取り入れたりしようとする子ども

○課題追究活動において見いだした事象についての新たな意味や価値，考え方を自覚しながら，新たな疑問に対して人とかかわりながらさらに学び続けていこうとする子ども

2 「関係の思考」「連続の思考」をつくる授業の方法

ここでは，授業のなかでどのようにして「関係の思考」「連続の思考」をつくり出していったかについて述べてみたい。

（1）マイ・パートナーとの学びを練り合い，「関係の思考」をつくる

子どもが「関係の思考」をつくるためには，まず社会的事象に詳しい人物と深いかかわりをもち，自分の考えをしっかりと確立しなければならない。そのために必要な自分だけの人物を，マイ・パートナーとして子どもの学びに位置づけてみることにした。

その後，マイ・パートナーとの学びで得た考えを他者の考えと比較したり検討したりしながら練り合っていくことにより，多面的な考察ができていくと考えたのである。

では，子どもがマイ・パートナーとの学びをどのように生かしていくのかについて，学びの過程をたどりながら述べてみたい。

①オーダー＆アンサーの関係がある集団をつくる

子どもは，自分だけのマイ・パートナーにかかわりながら学びを進めていく。そこでは，個別的な学びが保障されるであろうし，子どもなりに自信をもって学んでいくであろう。

そのような学びが展開されれば，子どもは，自分の学びを他者に伝えたい，他者の学びを知りたい，他者と共に学びのよさを味わいたいという思いを抱いてくる。

そこで，子どもが学んだ社会的事象の内容やそのことに対する思いを全員に公開できる場を設定する。このことが，学びを公開，表出することである。学びの公開，表出によって子どもは，事象相互を比較したり，その意味や役割を見直したりしていく。事象を多面的に見たいという思いの広がりが見え始めるのである。

そこで教師は，子ども一人一人の思いや願い（オーダー）に答えること（アンサー）ができるような集団を，子どもとともにつくっていくのである。

②「○○クエスチョンタイム」における，学びの共感や共有

「学びの集団」の中で，それぞれの学びの内容に対して質問したり答えたり，討論したりできるような時間を，「○○クエスチョンタイム」として設定していく。

この時間のなかで，子どもは次のような内容や思い，方法を他者と共感したり共有したりしていくのである。

・内容―工夫や努力，特色，大切，生き方，状況，役割，関係，盛衰など

・方法―人間が事象にかかわって抱いた喜び，悲しみ，驚き，辛さなど

③表現物に記録していく学びの道筋

子どもが自分の学びの変容や高まりを自覚していくために，学びの道筋を表現物に記録していくシステムを取り入れていく。

子どもは，他者との学びから得た社会的事象の内容や思いなどを付箋などに記して，表現物に蓄積していく。

このことを通して，事象に対する意味や働き，特色などをより的確に，総合的に理解できるだけでなく，学びの過程において他者と共感，共有した学びの内容や方法を自覚できる。また教師は，子どもの表現物から学びの高まりを見取っていけるのである。

（2）社会的ライブモデルとのかかわり合いを生かして，「連続の思考」をつくる

調べて考える子どもを育てていくための方途として，社会的ライブモデルとのかかわり合いを取り上げることにした。

①社会的ライブモデルとかかわり

社会的ライブモデルとは，今日の社会を映し出す生（ライブ）の事象（モデル）のことであり，事象を象徴している人や要素，状況などと定義していく。たとえば産業学習では，今日，製品を生産する過程で一番の工夫や問題となっていることであり，歴史学習では，現在に残されている当時の事象や受け継がれている考え方などである。

このような社会的ライブモデルについて調べ，他者に伝えるために紙芝居形式の表現物をつくることを学びの目的としていく。それは，紙芝居形式の表現物であれば子どもなりにストーリー性をもって作り進めていくことができるため，事象に携わっている人に対する自分たちの思いを明確にできると考えたからである。

②他の事象を調べた友だちとかかわる「○○こみっと」

その後，調べたことを他の事象とかかわらせて，相互に共通するものから，新たな意味や価値などを見いだしていくことができる「○○こみっと」を行っていく。

「○○こみっと」で子どもは，次のように学びを進めていく。

ア）事象相互の共通点や相違点，その理由などについて，他の事象にかかわっていた子どもに，質問する

イ）友達の考えを自分の考えと比べながら，新しく見いだした事象相互の新たな意味や価値などをカードに書く

ウ）自分と同じ考えや新しい考えを見つけるために，さらに他の子どもにかかわる

このような活動を繰り返すことにより，友達を通してみた事象への考えと，自分がみた事象への考えをもとに，事象相互の比較ができ，その関係や意味の違いなどを認識することができるのである（関係認識，相互比較，意味思考など）。

また，このことにより，自分の事実認識→意味認識だけでなく，他者の事実認識→意味

認識を理解することができる。また，自分や友達がつくった事象に対する考え方を比べることで，事象に対するより確かな解釈がつくられていく。つまり，事象に対する眼を複眼的に広げる学びが「○○こみっと」には含まれているのである。

③獲得した内容の見取り，評価

子どもは，「○○こみっと」で交流したことから新たに見いだされた疑問をさらに調べ，検討していくという学びを繰り返しながら，事象に対する見方や考え方を広げたり高めたりしていく。

教師は，「○○こみっと」で子どもが記した表現カードの枚数や内容，「○○こみっと」におけるかかわりの様相，単元を通して表現物に書かれた内容などから，他者との交流における子どもたちの学びを見取り，社会科の学習内容の獲得にどう影響していったかを評価していくことにする。

3 「関係の思考」をつくる授業の実際
6年「21世紀の語り部たち」ー長く続いた戦争とアジアの人々ー から

子どもは，国語での物語文の学習や広島への社会見学などから，戦争についての知識をもったり戦争の怖さを感じたりしている。また，祖父母から出征や空襲の様子を聞いている子もいる。しかし戦争は，子どもにとって身近ではないため，自分ごととしてとらえることができにくい。

そこで本単元では，子どもが戦争の怖さや悲惨さを21世紀に伝えていく語り部となり，戦争について主体的に調べ，紙芝居形式で表す「戦争読本」作りを中心に学習を展開していくこととする。

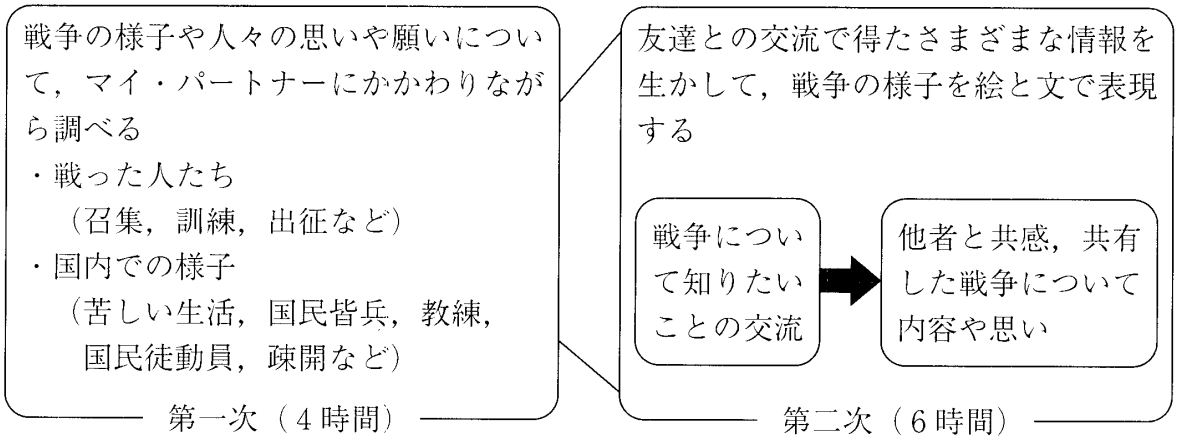
そのために，次の点に留意して単元を構成していくことにする。

○子どもの身近にいる戦争を体験された方々（祖父母など）をマイ・パートナーとし，積極的にかかわることにより学習を進めていく

○戦争に対するさまざまな事象や人々の思いや願いを感じることができるように，自分の調べたことを他者と紹介し合うことのできる場を設定する

戦争という事象に対して，多面的な考察，公正な判断ができる場や状況から，戦争を体験された方々の思いや願いを次の世代へと語り継いでいけるような学習を行おうと考えたのである。

＜学習の流れ＞（10時間）



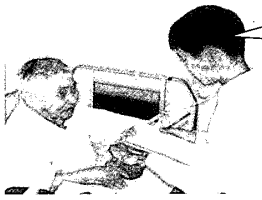
（1）マイ・パートナーとのかかわり

子どもは身近におられる戦争を体験された方々をマイ・パートナーとして決定し，訪問したり電話をしたりしながらかかわり，戦争のことについて調べながら，「戦争読本」を作るための資料を集めていった。

マイ・パートナーは当然のことながら子どもの人数ほど存在する。具体的な戦争体験は，次のとおりである。

○空襲を体験した方（光，徳山，下松，神戸，北九州など）
○出征した方（満州，台湾，サイパン，パラオなど）
○抑留された方（シベリア）
○日本に連れてこられた外国の方（朝鮮から）

マイ・パートナーとのかかわりにおいて，子どもは，次のような事実を知ったり，戦争に対する思いを抱いたりしていった。

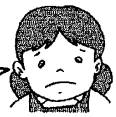


戦争のときは光にいて，空襲を体験したんだね。とても怖かっただろうな

お父さんが朝鮮から連れてこられて，日本で働かされていたのですね。つらかったでしょうね。

捕虜になったらほとんど休みもなく，食料もほんの少しなのに働かされるのかな。とてもつらかっただろうな。

台湾に4年間も行っていて，そこでアメリカから爆撃もうけたなんてびっくりした。4年間も家族に会えずにかわいそう。



戦争について断片的には知っていても，直接戦争を体験された方とかかわるのはほとんどの子どもが初めてである。子どもたちは，戦争の悲惨な事実を知るだけでなく，驚き，悲しみ，また怒りなどの感情を抱いていったのである。

その後，自分が一番心に残ったことを，一枚の絵に表現していった。この絵が，「戦争読本」の中心となる絵なのである。

この一枚の絵をかき終えた子どもは，次にどんな絵をかいていこうか考え始めた。そこでは，次のような思いを抱いていく子どもの姿を見ることができた。

ぼくは空襲の様子を絵でかいたけど，そのころの人たちはどんな生活をしていたのか知りたいな

つまり，マイ・パートナーにかかわって調べてきた戦争の一部分だけでなく，戦争の全体像をとらえて「戦争読本」に表現したいという思いに変わってきたのである。

子どもが戦争について多面的に考察し，公正に判断するためには，戦争に対するさまざ

まな情報をもとに，広い視野にたった戦争観をもつことができるような学習を行っていく必要がある。そのため，戦争についてのさまざまな情報交換や意見交換ができる集団を設定することにした。ここでは，「戦争読本」の中心となる絵を一枚かいた後，次のような流れで集団をつくっていったのである。

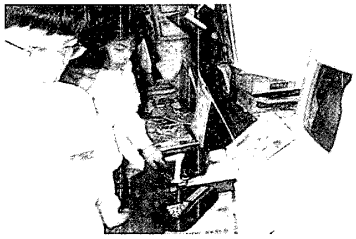
①次はどんな絵をかきたいか，どんな絵を自分の絵に付け加えたいかなど，自分の絵に必要な情報は何かについて考える

↓

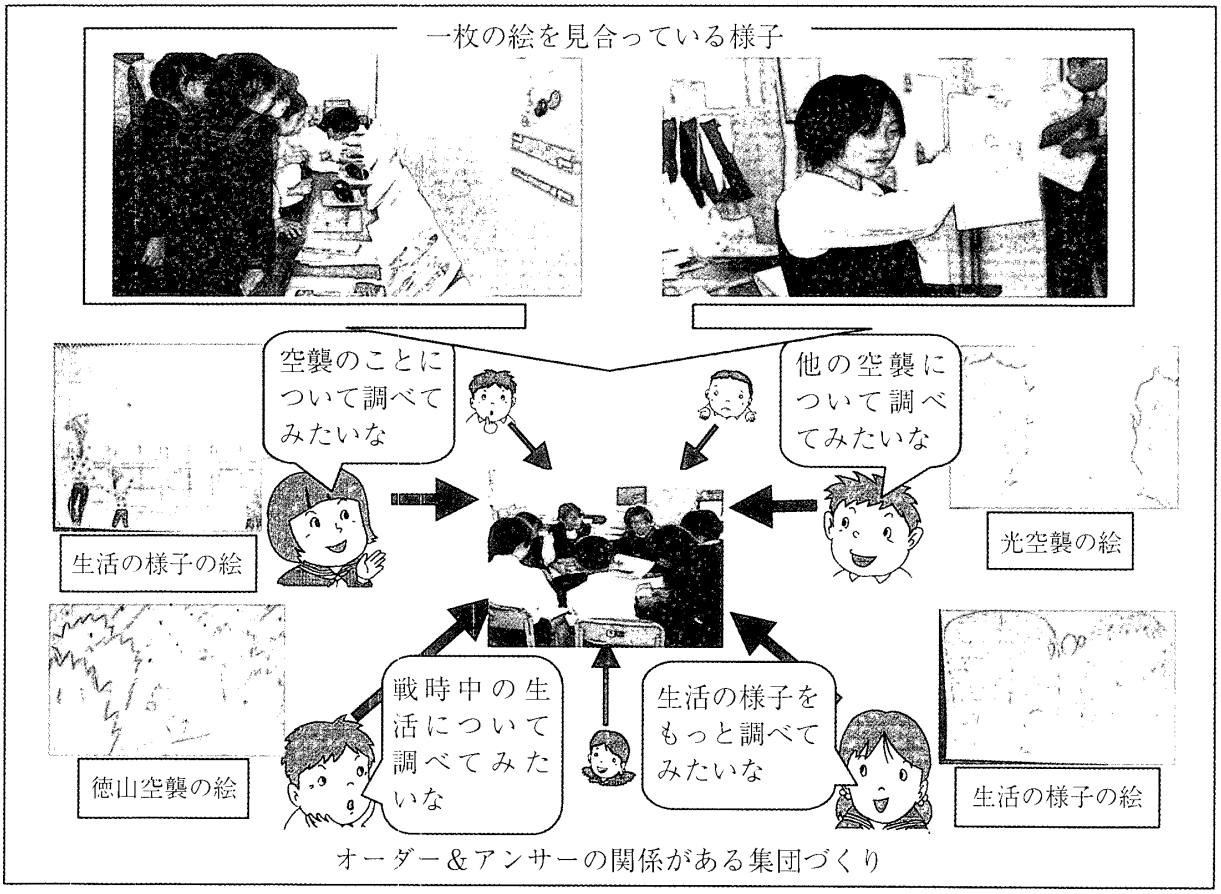
②友達がかいた絵を見合う

↓

③自分の要求を満たすためには，どんな内容の絵をかいた人とどのようにかかわりたいかについて決定する



この③の段階で，教師は子どもとともに，個々の思いや願いをかなえることができるような集団づくりを工夫し，子どもの思いや願いをもとに，どの子どもにもオーダーに対するアンサーがある集団づくりを行っていったのである。



ここでの集団づくりの工夫点を記してみることにする。

まず，友達がかいた絵を見合う活動である。自分の絵と似たものもあれば，まったく違うものもある。ここで子どもは，「この絵は空襲の怖さがよく表れているな」とか「どんなことを表しているんだろう。詳しく知ってみたい」という思いを抱いてきた。

そのような子どもの思いをもとに，集団づくりを行っていったのである。

たとえば戦時中の生活の様子を調べ，絵で表した孝子は，友達の絵を見て，

「空襲の様子についても調べてみたい」
という思いを抱いてきた。

そこで，光空襲について調べてきた正雄，徳山空襲について調べたA男が同じ集団に入るように，集団づくりを工夫していったのである。

また，その集団には，孝子が調べた戦時中の生活の様子についてもっと知りたいB子と，空襲を調べたけれど，次は戦時中の生活について知りたいA男を位置づけていった。

このことにより，孝子にとって，集団のなかに自分にとって必要な人がおり，また，自分を必要としてくれる人もいるという関係が成立する，

オーダー＆アンサーの関係がある集団

ができたのである。

他の子どもについても，上記の関係が必ず成立するような集団をつくっていき，大きな6つの集団ができあがった。

このように，集団づくりを工夫したことで，どの子どもも，集団への所属感や集団のなかでの存在感を感じることができたのである。

（2）「関係の思考」をつくる戦争クエスチョンタイム

自分が新たに知りたいことを確認し，集団に位置づいた子どもたちは，他者とともに，それぞれに自分のかいた絵を詳しく紹介したり，質問し合ったりしていく。そのような時間を，「戦争クエスチョンタイム」として設定していった。

この「戦争クエスチョンタイム」で子どもは，次のような社会的な見方や考え方を他者と共感，共有していったである。

〔内容的なもの〕

当時の国際情勢，戦争がおこった理由，外国での戦いの様子，戦争時の生活の様子（食事，くらし，学校など），アジアの人々に対する行為，空襲の様子，終戦の様子など

〔情意的なもの〕

マイ・パートナーが感じた戦争に対する悲しさ，戦争の苦しさ，終戦の喜び
子どもが感じた戦争についての思い　など

また，このような「戦争クエスチョンタイム」を通して，子どもは，今までかいた絵に何を付け加えていこうか，また，語りのなかにどんな表現をいれていこうかなどを考えることができる。

ここでは，他者と共有，共感した戦争に対する内容や思いなどを，付箋に表現し，蓄積していくことにより，戦争に対する自分の思いの高まりや広がりを子どもが自覚化できるようにしていった。

教師は，この蓄積から，子どもが集団のなかで誰からどのような影響を受け，どのように自分の学びに生かしていったのかを見取ることができたのである。

【出征について調べた洋子】

〔一枚の絵〕

ビルマに敵が攻めてきたので，日本人が玉砕しようとしている様子

洋子の祖父はビルマやシンガポールに出征した。そこで敵に攻められ，手榴弾で自決しようとしているところを一枚の絵にかいていた。

洋子はその後，そのような悲惨な戦争が日本ではどうだったのかと興味をもち，友達にかかわっていった。

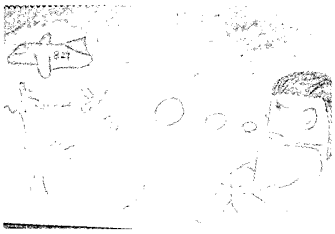
洋子はこの集団のなかで，日本の戦争の様子について下のようなことを付箋に書いた。

光には空襲があっただけでなく，人間魚雷の基地もあった	戦争に行った人だけでなく，国民みんなが大変だったんだ

洋子は，戦争が多くの人の命や町全体を犠牲にしたことを知り，出征した人以外の人々の苦しみを感じていった。

【光空襲について調べた正雄】

〔一枚の絵〕



光空襲のとき，防空壕で外の様子を心配している祖母

光空襲について祖母からの話をもとに一枚の絵をかいた正雄は，空襲による被害や人々の思いに興味をもち，他の空襲のことをかいた友達に積極的に質問していった。

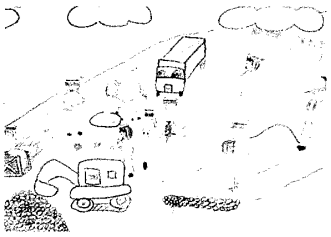
この集団には，空襲のことを正雄に聞いてくる子が多く，正雄は空襲の様子や祖母の思いを語っていた。また，空襲を受けた呉や徳山の様子と比較することで，付箋に書いていた。

軍の学校や工場など，重要な施設がある町が空襲にあった	空襲を受ける町から逃げ出した人もいただろうな

正雄は，空襲を受けた場所の共通点を知ることで，軍事施設がある理由やその町に住む人の思いなどを感じていった。

【アジアの人々について調べた由美】

〔一枚の絵〕



朝鮮の人が日本に連れてこられて無理やり働かされている様子

由美は自分の意志と関係なく日本で米づくりや道路づくりをさせられたアジアの人々（朝鮮の人）について調べた。

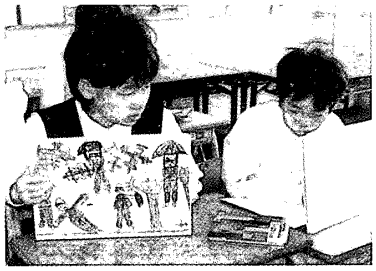
その後，アジアの国の様子を調べてみるため，出征について調べた友達とかかわっていった。

由美はアジアの国々に出征した人たちが，辛い思いをたくさんしたことを知り，付箋に書いた。

被害にあったアジアの国もあるし，出征した人も苦しんだのか

アジアの国のすべての場所において，戦争は不幸だったことや，戦争が終わってもまだ苦しんでいる人がいることを確認できたのである。

集団のなかにおける子どもたちの話し合い，および子どもが書いた付箋，その後の「戦争読本」の内容から分析してみると，集団内の友達にかかわって，次のような思考の変化を見取ることができた。



〔空襲や生活のことを調べた子ども〕

・他の空襲や生活の様子と自分が調べた空襲や生活の共通点や相違点を感じ，その事実や理由を分析していく

・空襲の原因や様子を，戦争当時の生活の様子と重ねて考えていく

〔出征のことを調べた子ども〕

・出征した人の思いや願いと，国内の人の思いや願いをつなげて考えていく

・出征―空襲―敗戦（その後の抑留）という時間軸の流れで戦争をとらえる

〔アジアの人々のことを調べた子ども〕

・日本国内にいたアジアの人々の苦しみを他者に伝えたり広めたりしていく

・アジアの国々での戦争の様子を詳しく調べていく

「戦争クエスチョンタイム」で戦争という事象をできるだけ多面的に見たり考えたりしたことにより，広い視野にたった戦争観をつくりあげていく子どもの姿を見取ることができた。

このような交流を繰り返しながら，子どもは「戦争読本」を完成させていき，戦争をより的確に，総合的に理解することができた。学びを通して「関係の思考」をつくり，戦争に対する見方を多面的に広げていく姿を見ることができたのである。

4 「連続の思考」をつくる授業の実際
3年「光おさかな物語(ストーリー)」ーわたしたちのくらしとものをつくるしごとー から

本単元は，光市の水産業について調べて，その特色や水産業に携わっている人の思いや願いなどを交流し合う活動を中心に学習を展開していくものである。

県内でも有数の漁港がある光市室積には，水産加工場，水産物販売店，栽培漁業センターなど，水産業に関係のある仕事が多くみられる。また，漁師として働いている人も多く，水産業は地域の代表的な生産活動である。しかし，乱獲による水産資源の不足，環境悪化，後継者不足など，今日の水産業は多くの問題を抱えており，室積も例外ではない。しかし水産業に携わっている人は，そのような問題に対峙しながらも，生産を向上させるためのさまざまな努力や工夫を重ねている。

このような水産業における今日のさまざまな問題を，社会を反映するモデル（社会的ライブモデル）ととらえていく。それは，問題にかかわりながら調べることにより，工夫や努力をしながら問題を乗り越え，生活しようとしている人の思いや願いを強く感じることができると考えたからである。

また，急激な社会の変化に対応できる子どもを育てるためには，室積の水産業という事象をとらえるだけでなく，「かつてはこうだったが今はこうなった」など，水産業の変化を的確にとらえ，その原因を調べ，そのことをもとに，広い視野で思考し続けていくことが大切となってくる。

そこで，次のように単元を構成していった。

第一次（7時間）
室積の水産業について人にかかわりながら調べ，紙芝居をつくる

調べる対象（人）
室積漁港，漁師さん，魚屋さん，網重水産，栽培漁業センター

調べ，まとめる内容
水産業の特色，働く人の様子など

第二次（5時間）
水産業の現状や携わっている人の工夫や願いについて話し合う

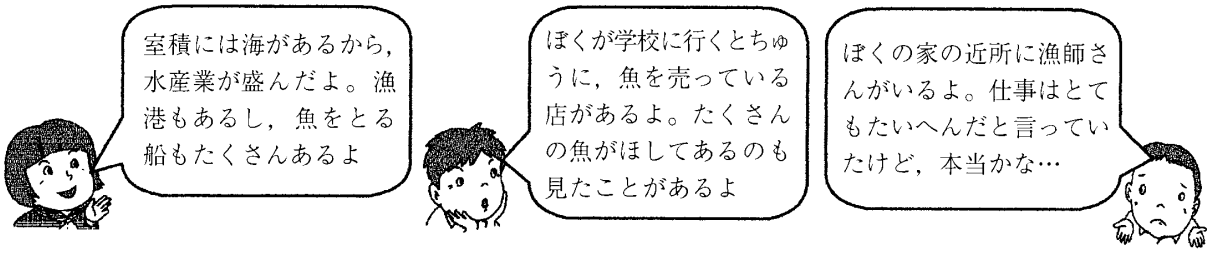
漁獲高の減少，後継者不足，環境問題

生産を増やす工夫，他地域との連携や協力，宣伝や広報，後継者をつくりたい思い，環境問題への対応　など

このような学習を通して，地元室積の水産業に関するさまざまな社会的事象を，地域の人や資料にかかわりながら調べることにより，地域の生産活動の自然条件とのかかわりや仕事の特色，他地域とのつながり，地域の人が抱いている思いや願いなどを強く感じることができると考えたのである。

（1）社会的ライブモデルについて調べて，紙芝居をつくる

子どもたちは，室積の水産業について，次のような思いをもっていた。



室積は漁港や市場などがあり，生活のなかで水産業に関する事象や人とかかわった体験をもっている子どもも何人かいたが，その特徴や携わっている人の思いや願いなどについては，なかなか気づきにくいものである。

そこで，室積の水産業を身近に感じることができるように，「室積の水産業のことを調べて紙芝居をつくり，室積お魚博士になろう」という学びの目的を子どもとともにつくっていった。そしてそのためには，何をどのように調べて，どう表現していけばよいかを話し合っていったのである。

その結果，子どもたちは，

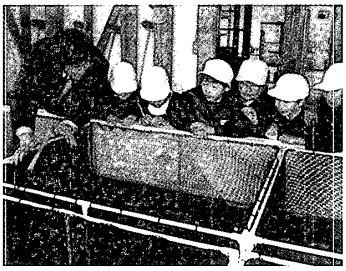
「室積にある水産業に関係のある場所に行き，働いている人に話を聞いたり質問をしたりして調べてみよう」

「調べてわかったことを紙芝居にして表してみよう」

ということを決め，「光漁協，漁師，魚屋，網重水産，栽培漁業センター」に調べに行くことにした。

その後，質問事項などを話し合った子どもたちは，小集団ごとにそれぞれの場所に行き，人にかかわりながら学びを進めていったのである。

光漁協 9人		漁港に見学に行った雄二たちのグループは，まず，獲れる魚の量や種類に着目していた。漁協の人は，季節によっていろいろな魚が獲れるということと同時に，魚が減っているということを説明してくださった。 このことに驚いた雄二たちは，なぜ魚が減っているかを追究していった。
漁師 10人		漁師さんを探して室積の港を歩いていた良夫たちは，船で仕事をしていた漁師さんに話を聞くことにした。 漁師の仕事は大変だということを聞いて納得していた子どもたちであったが，後を継ぐ若い人がいなくて困っているという漁師さんの本音を聞くこともでき，どうしたらいいのかという思いを抱いていった。
魚屋 7人		魚屋さんにインタビューした恵子たちは，室積の魚は美味しくて人気があるということを知り，喜んでいた。 しかし反面，その美味しい魚が最近獲れなくなったということや，その原因が環境破壊にあるということを聞いて驚いていただけでなく，どうすればよいのかを考えていた。

網重水産 6人	網重水産は，室積で獲れた魚を加工して，生産，販売する業者であり，地元だけでなく，中央においても高い評価を得ている。 ここを調べた子どもたちは，働いている人から，仕事は大変だけど，室積の魚は美味しいから人気があるということを聞いて喜んでいた。
栽培漁業センター6人	 栽培漁業センターは，ヒラメやアワビ，カサゴなどの中間育成を行う公的施設である。 ここを調べた正彦たちは，魚が獲れなくなったので，稚魚を育てなければならなくなったことを聞いて驚いていた。その結果，魚が獲れるきれいな海にしたいという思いを強めていった。

このような学びを行うなかで子どもたちは，室積の水産業について次のような事実を知ったり，携わっている人の思いや願いなどを感じたりしていった。

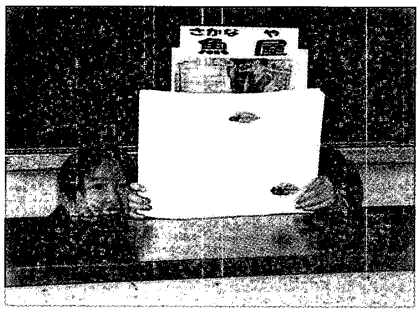
室積には水産業に携わっている人がたくさんいる，室積の魚は美味しいので人気がある，室積は季節に応じていろいろな魚が獲れる，室積の魚は地元だけでなく東京や大阪などにも出荷されている，魚は最近獲れなくなっている，魚が獲れない原因は海などの環境が汚れているからである，漁師の仕事はきついので若い人はやりたがらない，水産業に携わっている人は魚がたくさん獲れるようになってほしいと願っている　など

このような事実や思い，願いなどをもとに子どもたちは，友達にわかりやすく紹介する表現物を作成していった。子どもたちは，調べたことを羅列するのではなく，自分たちの思いや考えなどを入れながら，絵芝居づくりを進めていった。

（2）室積の水産業についての思いや願いを交流し合う「お魚こみっと」

つくった紙芝居を発表した後，教師は子どもたちと次のような話し合いをしていった。

T　それぞれの紙芝居を見て，同じようなことはなかったかな？
良夫　室積の魚は人気があるんだけど，少なくなったみたいだよ
恵子　魚屋さんも最近は魚があまり獲れなくなったと言っていたよ
C　どうしてかな…



そこで，近年漁獲量が減少してきたという事実を「社会的ライブモデル」と設定し，その原因や，そのことに対して室積の人が行っている工夫や努力について，いろいろな立場から意見を交換し合う「お魚こみっと」を行うことにした。このことを通して，室積の水産業の現状だけでなく，水産業の問題に対峙している人の思いや願いまでも感じることが

できることを期待したのである。

「お魚こみっと」は，次のような方法で行うことにした。

①魚が減っていることに対して，自分が調べた事象以外の事象を調べた人に，「どうして魚が減っていると思う？」「○○の人はどんなことを思っている？」などと質問しながらかかわる

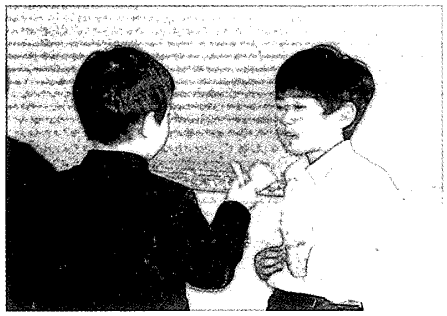
②かかわって新しく知ったことや再確認したことを，カードに記入する

③魚が減った理由や，魚を増やすために室積の人が行っていることについて話し合う

④新しい発見をするために，他の事象を調べた友達にさらにかかわる

このようなかかわりを繰り返すことにより，調べたことから新たな疑問をみつけ，またさらに考えていく「連続の思考」をつくっていったのである。以下，「お魚こみっと」における学びの様相の一部を記してみたい。

○漁協を調べた雄二の学び

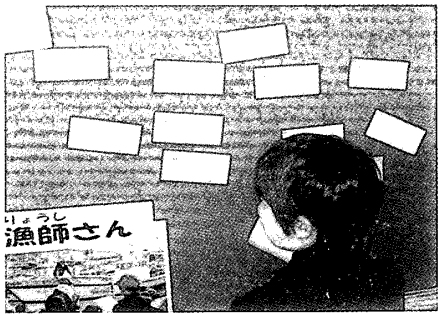


雄二は，魚屋を調べたA君とかかわり，「洗剤が海に流れるので海が汚れる」という新しい事実を知り，ショックを受けながらカードに記入していた。

その後，栽培漁業センターを調べた友達二人とかかわり，なぜ稚魚を育てているのかを，漁獲量の減少と結びつけて考えていた。

これらのかかわりにより，環境保全の大切さ，魚を増やすことの意義などを感じることができたのである。

○漁師を調べた良夫の学び



魚が少なくなって困っているという漁師の悩みを感じていた良夫は，栽培漁業センターを調べた正彦など二人にかかわり，「魚の獲りすぎで魚が少なくなってきた」「小さい魚まで獲るから魚がいなくなってきた」という事実を知り，カードに記入した。

その後良夫は，違う友達とかかわったたり，黒板に貼られた友達のカードを見たりしながら，漁獲量の減少は，「家庭排水」「工場廃水」「赤潮の発生」「乱獲」など，たくさんの原因があることを知り，問題発生の原因の多様性に気づいていったといえる。

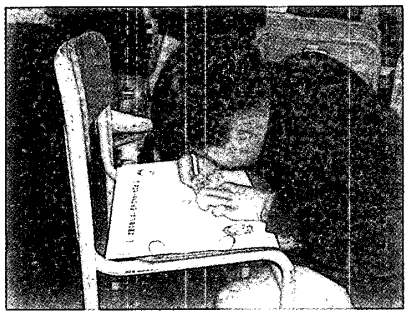
○魚屋を調べた恵子の学び

恵子は，多くの友達とかかわり，魚屋では得られなかった新しい情報をたくさん得ることができた。

そのなかでも，栽培漁業センターのB子から得た「赤ちゃんの魚を育てて海に返す」という事実をカードに書いた。このことに驚いた恵子は，今まで知らなかった栽培漁業センターができた理由についてB子にかかわりながら考えていた。

友達からも多く質問を受けており，新しい疑問も多く見つけることができた恵子は，疑問の理由などをさらに調べ，考えることで，確かな内容を獲得していったのである。

○栽培漁業センターを調べた正彦の学び



正彦は合計10枚近くカードに記入し，「油が海に浮き，酸素が減って海が汚れる」「釣り客などのごみで海が汚くなる」など，海の汚れについての情報を多く収集していた。その結果，栽培漁業センターがつくられたのは，魚が減ってきたからということを確認することができ，カードに「海がきれいになって魚が増えてほしい」と書いた。

環境破壊の現実と，それを乗り越えて努力している人間の工夫を十分に感じて，海を大事にしてほしいという素直な感想をもつことができたのである。

この「お魚こみっと」では，友達の学んだ内容と自分の学んだ内容をつなげて考えていった様相が多く見られた。つまり，事象の理由や意味，特色，働きなどについて友達とかかわりながら考えていくことにより，事象相互のつながりを確かに理解することができたのである。

そのことにより，事象に携わっている人の思いや願いを強く感じることができるだけでなく，室積の水産業に対する自分の考えや，「私たちはこうしたらいい」という意見までもつけ加えて表現することができた。これは，社会的実践力につなげていく意味でも，価値があると考えている。

本実践は，室積の水産業における漁獲量の減少という今日的問題を社会的ライブモデルとした実践であった。子どもたちが調べる対象はさまざまであったが，共通に存在している問題をクローズアップしたことにより，子どもたちは，その原因を調べるために他者とかかわる必要性を感じ，積極的な交流を行っていった。また，子どもの姿から考察すると，次のような成果や課題があがってきた。

○　自分たちが調べた対象や人について，ストーリー性をもった紙芝居をつくっていくことにより，室積の水産業に携わっている人の思いや願いを子どもなりに理解することができ，地域の人をより身近に感じることができた。この学びがあったからこそ，「お魚こみっと」において，事象に対する地域の人や自分の思いなどを他者に伝えよう，聞いてみようという思いが高まってきたと考えられる。

○　「お魚こみっと」を行うことで子どもたちは，「お魚が減ってきた他の理由を友達から教えてもらうことができるのではないか，お魚が減ってきた理由を友達と確認できるのではないか」などいう思いを抱いていった。このような思いを強く抱くことができるような場や状況の設定が「○○こみっと」には欠かせないと考えている。調べたことをもとに考え，それをもとにまた人にかかわり調べるという学びが組織されるためには，立場により漁獲量が減少した原因のとらえ方が違うように，「○○こみっと」で多様な考えがでてくるような構成を工夫しなければならない。

○　自分の考えの高まりをしっかりと自覚できるように，事象に携わっている人物の思いが本人の言葉として出てくるような表現カードを使った相互交流をねらっていた。結論を言えば，表現カードの枚数や内容から，その子なりの学ぶ意欲の高まりや内容の深まりはある程度見取ることができる。このような表現カードをさらに工夫していくことにより，子どもは学び続ける意欲をもつことができると考えている。